

研究ノート

モノ探し行動における「効率」について
— “モノ探し行動” についての小考 (7) —

佐々木 土師二

An approach to the behavior of “looking-for-something” (Part 7):
On the efficiency in the search of lost objects

Toshiji SASAKI

Abstract

The efficiency in the search for lost objects was discussed in the framework of cost-performance. The cost of search behavior is based on multiple strains as follows: physical, psychological, temporal, economic, and social. To determine the total amount of these strains, it is necessary to apply a common measure to all of them. The psychological measure is applicable to estimate the total cost, and it is estimated by the searchers themselves after finishing the search behavior. The performance of the search behavior is primarily the achievement of the search purpose, that is, the finding of lost objects. As a secondary performance, the avoidance of economic loss and the acquisition of psychological satisfaction are experienced. In daily living, “finding out in a short time” is generally accepted as “the effective way to search” for lost objects. However, the reduction of temporal cost is mostly attained by the substitutional increase of the other cost; thus the efficiency of search behavior must be estimated by the total cost.

Keywords: search behavior, lost object, efficiency, total cost, cost-performance, effective way of search

抄 録

モノ探し行動の「効率」の問題を「コスト・パフォーマンス」の枠組みで考察した。コストは多元的で、身体的・心理的・時間的・経済的・社会的な諸側面での負担であり、その行動の問題認識・探索意思決定・実行（開始・探索）・終了の各段階で生じるが、それらの負担の全体（トータル・コスト）は負担感として心理量で求められる。トータル・コストの把握のために探し手が採用するヒューリスティクスには多元的累積方式と総括的印象方式があるが、一般に多く採用されるのは後者である。パフォーマンスは第一義的には「失くしたモノを発見する」という目標達成であるが、これに経済的損失回避や心理的満足感が付随する。生活技術的観点から「短時間で探し出すこと」が「効率的な探し方」とされることが多いが、時間的コストの低減が他の諸コストの増大に代替されるのが普通であるので、「効率的か、否か」はトータル・コストの問題に帰することになる。

キーワード：モノ探し、効率性、コスト・パフォーマンス、ヒューリスティクス、トータル・コスト、
効率的な探し方

はじめに：モノ探しの「効率」を考える

モノ探しは、通常、そのモノが必要になってから行われ、必要性を感じないのに行われることはまずない。そのうえ、モノ探しには「仕方なく行う」「新しいことは生み出されず元に戻すだけ」「時間の無駄遣い」というような負のイメージや「イライラする（焦燥感）」「見つけられるだろうか（不安感）」などの負の感情が伴っていることもある。こうした緊急性と負の感情のために、探し手は「少しでも早く見つけたい」「手っ取り早く終えたい」という気持ちで臨んでいることが多いだろう。それに関連してか、「上手なモノ探し」「賢いモノ探し」「苦勞せずに探す方法」などと「効果的な探し方」という生活技術的な知恵を求められることがある。現に、筆者が第3～第5稿（佐々木，2019b, 2020a, b）で出典とした情報は「探し物を見つける方法」というカテゴリーのインターネット・サイトから得たものであるが、そのサイトでの情報提供には一般の社会的要求の一端が表されており、端的に言えば「ハウ・ツー（how to）・モノ探し」という実践的生活技術を披露する意図があるように思われる。

こうした生活技術という観点からみれば、筆者の一連の小論（佐々木，2018, 2019a, b, 2020a, b, 2021）はそうした具体的要求に応えられる応用的発想を含んでいない。ただ、それらの小論での記述内容をふまえて、モノ探し行動の「効率」に関する基本的問題を考察することは必要だと考えている。

しかし、ここで考えなければならないのは、上記のような「上手な探し方」「賢い探し方」などの言葉で表される「効果的な探し方」が何を意味しているかを把握することである。つまり、この小論の第5稿・第6稿（佐々木，2020b, 2021）で述べているように「モノ探し」が一連の行動過程を経て「探しモノを見つける（あるいは、見つけられない）」という結果に至ると見るとき、その過程の全体から生み出される「結果」までの“内容”のどの現象が「効果的な探し方」に該当するのかを把握しなければならない。その際、行動過程内での「部分的な効果」の「全体的な効果」への結び付き方が問題になる。

こうした問題にできるだけ分かりやすい論理でアプローチしたいが、そのためには「コスト・パフォーマンス（cost performance）」の枠組みで考えるのが適切ではなかろうか。

（注）「コスト・パフォーマンス」は「投入される費用や努力に対する成果の割合」（『広辞苑』第4版）を意味しているが、元の意味に即して「費用対効果」と訳されることも多い。しかし、本稿では「コスト」も「パフォーマンス」も経済的意味だけでなく身体的・心理的・時間的・社会的な意味を含むものと考えているので、コストを「負担」、パフォーマンスを「成果」と訳すことにし、そ

の英和両方の語句を用いている。このような「コスト」と「パフォーマンス」の2語を合体した「コスパ」という略語がつくられて「お得感」「値段と釣り合っている」というような意味で若者たちに日常的に用いられている。巧みな使い方だとは思いますが、本稿では「コスパ」という語句は用いない。

I モノ探し行動における「効率」

1. コスト・パフォーマンスの枠組みによる「効率」のとらえ方

(1) コスト・パフォーマンスの多元性の問題

コスト・パフォーマンスの枠組みで「効率性が高い」というのは「コスト（負担）に対するパフォーマンス（成果）の割合が高い」ことである。

モノ探し行動で「効率性が高い」ことは「短時間で発見する（＝完了する）」を意味することが多いが、それだけでなく「できるだけ楽に」「費用をかけずに」「他人の世話にならずに」などの意図を果たしつつ完了することである。言うまでもなく、そうした意図があっても「探しモノが見つからなかった」という結果に終わっては意味がなく、その行動のパフォーマンス（成果）として「探しモノを発見すること（＝完了）」がなければ「効率的」とは言えない。つまり、この問題では「パフォーマンス」は最終的に「失くしたモノが発見される」という具体的成果が得られることを不可欠の条件にしており、そのうえで何らかの経済的・心理的なベネフィットが得られることである。

コストの多様性

一般に、どんな行動でも遂行するためには「コスト（負担）」がかかるが、モノ探し行動では主に次の4種類のコストがまず必要だろう：

- ① 身体的コスト… 身体的労力の投入であり、その程度は行動の量と質でとらえられ、移動距離や探索面積などの物理量で表すことができる場合があるが、苦労感や疲労感も間接的な測度になりうる。
- ② 心理的コスト… 努力度や心労度に代表されるが、知識や技術の適用など問題解決的なものもあれば、不安・緊張・焦り・苦労などの低減を図る緊張解消的なものもある。
- ③ 時間的コスト… 時間投入量であるが、投入行為の性質（たとえば、それが主目的で行われるのか否かという違いや、連続的か間欠的かという構成面の違いなど。）も関連する。投入時間量の認知には、その物理（客観）量だけでなく、付随感情や目的意識などの心理（主観）的側面も影響するので“時間消費感”が問題になる。
- ④ 経済的コスト… 金銭的支出や物質的消費量であり主に客観的金額で表されるが、そ

の心理的評価・印象も測度になりうる。

さらに、これらに付帯したり派生する社会的コストもある：

- ⑤ 社会的コスト… 他者（個人、組織など）の支援を求めたり情報提供を受ける場合に生じ、その内容には上記①～④のコストが重複している。「占い」や「まじない」などの呪術的方法の利用では他者に依頼することが多く、通常このコストを伴う。

重要なことは、これらのコストの間には補完的あるいは代替的な関連があり、たとえば、経済的コストをかける（増やす）ことによって身体的コストや時間的コストを低減できる場合も多く、逆に経済的コストを節減するために他のコストが膨らむ場合もある。こうした相互関連性を考えると、これらの個別的成本を単独にとらえるだけでなく、それらを“総和（あるいは集積）”した全体的コスト（トータル・コスト）が問題になる。トータル・コストの把握では、モノ探し行動は多段階的に構成されていると見られるため、各段階でのコストの発生を考慮する必要がある。

パフォーマンス

「パフォーマンス（成果）」は第一義的には「目標を達成すること（つまり、失くしたものを発見すること＝完了）」であるが、副次的には多元的な性質のものが含まれている。「探しモノを発見する」ことには、そのモノを失うことによる金銭的損失を回避できるという経済的利得が伴うが、さらに、そのモノへの愛着や必要性を断念しなくてもいいという安心感、探索努力の傾注に対する見返りとしての達成感など、集約すれば「満足感」と表現される心理的側面も関連しており、時には対人的信用失墜を回避するというような社会的側面が含まれる場合もある。そのため、パフォーマンスの全体像を把握する場合にも異質的な諸側面の程度（量や強さ）を“総和”することが問題になるが、その際、われわれの行動では「成功すれば、それまでの苦労を忘れる」とか「失敗すると、損失感が大きい」というように、パフォーマンス（成果）がコスト（負担）に影響するという関係もあるので、個別的なパフォーマンスの“単純総和”で片づけることができないという問題も生じる。

異質的要素の総和

こうしたコストやパフォーマンスの多元的性質を考える時、“総和”にあたってはそれぞれに含まれる異質性を越えた“共通尺度”を適用することが求められる。それには、たとえば「その際には苦労した」、「要した時間が長かった」「かかった費用が多かった」というように異なる負担面を「心理的コスト」へ変換するという手段を講じることによって、「心理的尺度」で数量化された多元的性質の“量的総和”を導き出すのが妥当な方法であろう。

つまり、コスト査定やパフォーマンス評価という“認知”に収斂させて、探し手の心理的現象の測定や比較を行うのである。この問題へのアプローチは心理学的作業になる。

(2) 多段階的なモノ探し行動

モノ探し行動のパフォーマンスでは「探しモノを発見した (=完了) か、否か」ということが最終的には重要であるが、その最終的成果はいろいろな潜在的成果の蓄積のうえに成り立っている。

つまり、モノ探し行動は「問題認識⇒探索意思決定⇒実行 (開始→探索)⇒終了」というプロセスで成立しているので、その各段階で、諸コストが投入され、パフォーマンスがあると考えられるからである。各段階を構成する諸行為については、前稿 (佐々木, 2021) で図式モデルにまとめているが、それを再掲したのが図1である。

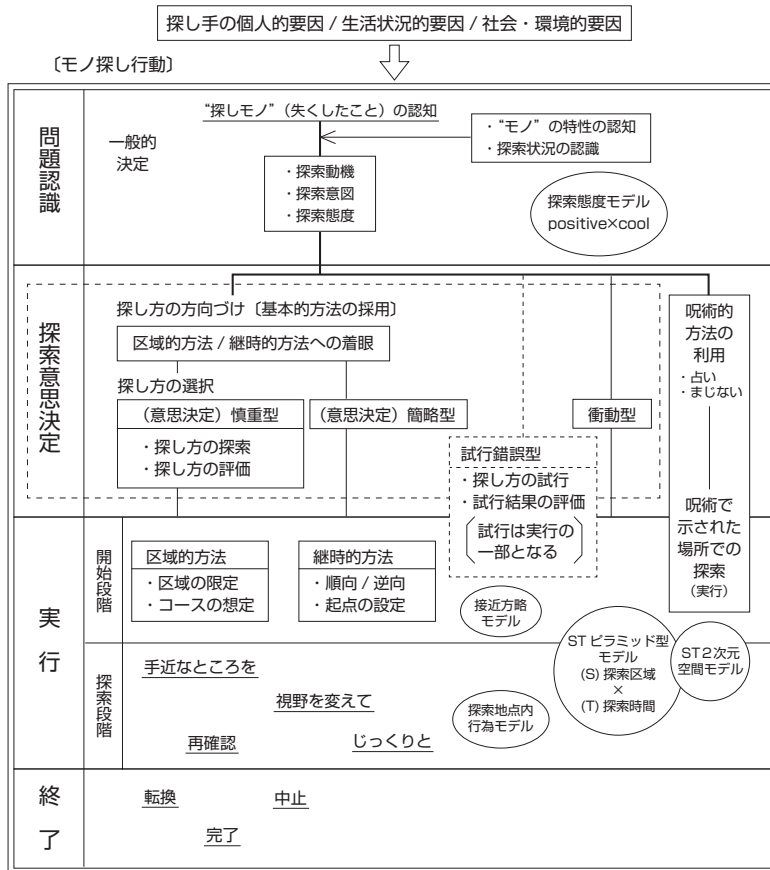


図1 「モノ探し行動」の包括的モデル (佐々木, 2021)

このモデルの各段階で、行為の遂行にはコストが必要であるが、その成果（パフォーマンス）は必ずしも明白ではない。「問題認識ができた」「探索意思決定ができた」「実行できた」「終了できた」ということは、それぞれ“下位目標の達成”ではあるから“成果”であり、それをふまえて生起する「次の段階に進行できた」ことも“成果”になるだろう。そして、終了段階での「完了」という“最終的成果”を得るためには、各段階で「次の段階に進行する」ことが不可欠であるので、それらは「潜在的（あるいは、手段的）成果」と呼ぶことができるだろう。

他方、コストはより顕在的である。とくに所要時間である「時間コスト」ははっきりしており、「心理的成本」もとらえることはできる。実行段階での「身体的コスト」は体験内容で表されるし「経済的成本」を投じる場合にはその金銭量は把握可能である。

したがって、「コスト」は経過段階でも多面的であるが比較的顕在的であるのに対して、「パフォーマンス」として具体的なものは最終的な「完了（＝目標達成）」とそこで生じる経済的利得（損失回避）や心理的満足感が主であり、経過段階での成果の多くは潜在的になる。

2. モノ探し行動における「コスト」

(1) 各段階における「コスト」

どの段階の行動でも時間を要するので「時間コスト」は共通要素になる。同様に、「心理的成本」も必要で、すでに保持している知識や経験だけでなく、新たに考えたり調べたりする知的労力もその一部になるし、さらに不安や焦燥などの負の感情を低減する必要があるればその緊張解消努力も「心理的成本」に加わるだろう。他の「身体的コスト」「経済的成本」「社会的コスト」などは、モノ探し行動の過程のなかで異なる関わり方をする。その概要を仮説的に述べれば次のようになるだろう：

問題認識の段階

探しモノ（失くしたこと）を認知した場合、その探し方を考える前に、「いつ、どこで、失くしたか」を思案するに違いない。その程度が深刻であれば、無視できない「心理的成本」が生じる。また、失くしたと思われる場所や関係する人に連絡して、そのモノの所在を尋ねることがあるかも知れない。その際には、情報収集のための「社会的コスト」を要し、連絡・通信のための「経済的成本」がかかることもある。しかし、稀には、探すことを初めから止める（あきらめる）場合もあるだろうから、僅かな「心理的成本」を要するだけにとどまる事態も考えられる。

探索意思決定の段階

この段階では「心理的コスト」が特に大きいことが特徴になるが、それが「時間的コスト」の増大を招くこともあるだろう。いろいろな選択過程が含まれており、その際には知的労力の投入が必要になるが、「迷い」や「躊躇」などとともに「不安」や「焦り」などの負の知的・情緒的負担を低減することも「心理的コスト」の発生につながる。こうしたコスト負担は“探し方の選択”によって違いがあり、「衝動型」では相対的に小さく、「(意思決定) 慎重型」や「試行錯誤型」では大きいだろう。

他方、「呪術的方法の利用」では、そこに至るまでに「心理的コスト」や「時間的コスト」がかかっていると想像されるが、直接的には「経済的コスト」を必要とし、外部の個人・組織の支援を得ることによる「社会的コスト」も付加されることになるだろう。

実行の段階

この段階では「身体的コスト」が特に顕著になる。これまでの2段階では知的・情緒的な機能への依存が大きかったが、ここでは実行行為が中心になるからである。

もちろん、その実行行為に伴い「時間的コスト」の負荷が生じるし、さまざまな知的機能や情緒的経験が生じるので「心理的コスト」も増大する。交通機関や通信手段が利用される場合には「経済的コスト」も加わるだろう。さらに、探し手には外部の個人・組織の支援を得ることで生じる「社会的コスト」が必要になる場合もある。

他方、「呪術的方法の利用」では、それ自体が「占い師」や「まじない師」に頼る行為であるため「社会的コスト」を要することになる。また「経済的コスト」が直接的に必要になり、かりに呪術を利用するかどうかで迷うようなことがあれば、「心理的コスト」「時間的コスト」を要するだろう。

終了の段階

モノ探し行動が「完了」して探しモノが発見されれば最終的成果を得ることになり、「コスト・パフォーマンス」についての結論を得ることになる。しかし、そのパフォーマンスと比較されるのは、この段階でのコスト負荷だけでなく、それまでのコスト負荷の全体（トータル・コスト）である。

終了の別の形である「中止」では成果が得られないので、それ以前のコスト負荷は無駄になってしまう。ただ「ここまでやったのだから…」という納得感や「これ以上努力してもコストが増えるだけ…」という“理由づけ”もありうるので、パフォーマンスとの関係は複雑にならざるを得ない。その「中止」が一時的な休止であって、再開される場合には、新たなコスト負担が生じることになる。「転換」では成果を得られるか否かの判明が延期さ

れることになるが、実行は継続され、さらにさまざまなコストの負荷が、小規模であっても、必要になる。

(2) 段階間移行時に生じるコスト

段階間の移行は状況による差異が大きい。連続的なことが多いだろうが、間隔が置かれることもある。そこでは、モノ探しを続けるか否かを迷うこともあれば、そのままスムーズに次の段階に進むこともある。共通して「心理的コスト」が関連するが、その程度はさまざまであろう。

(3) トータル・コスト

このように、モノ探し行動の各段階で必要とされるコストは、それぞれの段階での行動の特徴を反映して、きわめて多様なものになる。前項(1)(2)の記述をまとめて示すと表1のようになる：

表1 モノ探し行動の各段階に関連するコスト要素 (仮説)
(↓は段階移行を意味し、◎は強く関連する、○はやや強く関連する、を表す。)

探索段階	コスト	身体的	心理的	時間的	経済的	社会的
問題認識の段階			◎	○		
↓			○			
探索意思決定の段階			◎	◎		
↓			○			
実行の段階 (開始)		◎	○	○		
↓			○			
実行の段階 (探索)		◎	◎	◎	○	
↓			○			
終了の段階			◎			
呪術的方法の利用			○	○	◎	◎

そのうえ、これらのコストを把握する量的単位に行動量、心理量、時間量、金銭量などがあるので、これらを直接的に比較したり総和することはできない。なんらかの“共通単位”を持った測定量に変換することが必要になる。そのためには、“コスト負担感”を示す「心理量」として共通尺度を作り、この心理量で多段階から成るモノ探し行動のトータル・コストを求めるのが現実的である

しかし、その全体量を求めるために多元的コストを「しらみつぶし」的に把握することは無理であるし、そのために多大な心理的エネルギーを投入する意味がないことも多い。

ところが、ふだん、われわれは複雑な課題をより扱いやすい単純なものに変換し、直感

的に行う簡便な判断方略を日常的に採っている。この簡便方略は「ヒューリスティックス (heuristics)」と名付けられているが、多少の見落としや歪曲があっても、近似的な解を得るための実用的で合理的な判断の仕方になる。

このヒューリスティックスによってモノ探し行動のトータル・コストを把握する方式には、大別して次の2タイプがある：

- ① [多元的累積] コストを構成する多段階的で多面的なコスト要素を積み上げる積算法である。しかし、コスト要素が多数になると、実際的には相当複雑で困難な作業になるので、そのなかで関連度が特に強いコスト要素のいくつかにもとづいてトータル・コストを成立させる簡便方略を採用することになる。この方式で形成されるコスト負担感は「コスト認知」と称することにする。
- ② [総括的印象] コスト要素の積み上げは直接的には行われず、それらがまとまった全体印象による総括的なコスト感を持つ方略である。モノ探し行動の諸段階で投入された多様なコストに直接依存するのではなく、その最終段階で行動過程全体をふり返って感じられトータル・コストを問題にする。モノ探し行動の完了に伴う最終的な認知結果として成り立つパフォーマンス感に対応させる時、それに見合うレベルのトータル・コスト感に着目することには意味があると考えられる。この方式によるコスト負担感とは、①の「コスト認知」と区別するために「コスト意識」と称する。

この2タイプのトータル・コスト（感）の成立は、“ヒトの顔の認知”や“人物に関する印象形成”などからも類推できよう。「顔の認知」では、① 顔の要素である額、目、鼻、口、顎などの諸特徴をいちいち吟味して、それらの個別的特徴やその全体的バランスからイメージが形成されることもあれば、② 一目見て直感的にイメージが形成されることもある。また「人物に関する印象形成」でも、① 相手の身体的特徴や行動のさまざまな側面の個別的印象を積み上げて全体的印象を形成することもあれば、② 僅かな特徴から直感的に全体像を作り上げることもある。このような① 多元的累積や② 総括的印象は、われわれの日常生活の多くの場面でよく経験することであるが、モノ探しのコスト感の成立にも当てはまるだろう。

トータル・コストの形成にあたって、段階別コストは、多元的累積方式か総括的印象方式かで、異なる働きをすることになる。

多元的累積方式では、多くの段階別コストを対象にしたヒューリスティックスが行われて、トータル・コストが形成されるだろう。その際、実行段階（探索）で関連コストの範囲がとくに広いために、この段階での負担感が全体評価に強く影響することが考えられる。

他方、総括印象方式では、段階別コストの影響は間接的であると思われる、どの段階別コストが有力であるかは予測しにくい。ただ、とくに強い影響を与えた単独コストがない限り、一般的には、実行段階（探索）のコストの複合的影響が強いだらうと思われる。

II 日常生活での行動コスト

1. モノ探し行動の経験的特徴と低コスト指向

(1) モノ探し行動の経験的特徴

日常生活でのモノ探し行動を見てみると、次のような特徴があるのに気づく：

- 1) “小さなモノ探し”が多い： 大抵の場合、心理的価値や経済的価値が低いモノについて行われる“小さなモノ探し”である。そのためパフォーマンスとしての“利得”が小さいので、投入するコストも小さくなる。
- 2) 頻繁に行う行動である： 日常生活で頻繁に行うこと（反復的）であり、対象物や探索状況が異なっても新奇な経験（＝問題解決）とは感じられないため、慎重に取り組まなければならないという意識が希薄である。
- 3) 日常生活の“すき間”で行われる： 日常生活では定期的に行う“柱になる（重要なこと）”があるが、モノ探しは問題が発生した時に“対処的”に行う“臨時的”なことである。そのため高いコストは投入されにくい。
- 4) 「やむを得ず行うこと」で楽しいことではない： できれば「やりたくない」ことであり、回避したいことである。そのため、モノ探しは楽しいことでなく、イライラしながら行うことも少なくない。
- 5) できれば他人に知られたくないことである： 探し手にとって「誇らしい行動」ではなく、場合によっては「信用失墜」につながるかもしれないことである。
- 6) 状況への依存度が高い： 対象物の性質はもとより、その探しモノを必要とする生活的・社会的状況によって、その行動は大きく異なる。
- 7) 探し方は生活技術として教えられない： 生活的な問題解決行動でありながら、それが“技術”として教えられることはなく、学習機会はまずない。“手を洗う”や“挨拶する”などは「正しいやり方」という形の説明や指導が行われることがあるが、モノ探しについてはその人の知恵や“やる気”にまかされている。

これらの項目を組み替えると次のようになる：

- ① 1) “小さなモノ探し”が多い、2) 頻繁に行う行動である……要するに「生活雑事」である。
- ② 3) 日常生活の“すき間”で行われる……日常生活の“本流”を左右するものではない。
- ③ 4) 「やむを得ず行うこと」で楽しくない、5) できれば他人に知られたくない……目立たないように行いたい。
- ④ 6) 状況依存度が高い、7) 生活技術として教えられない……探し方の標準的方法はない。

どれも、その行動の遂行には「コストをかけたくない」という“低コスト指向”を促すものであろう。そこで、普段のモノ探しでは「短時間で探し出す」「楽に見つけ出す」「費用をかけずに完了する」など低コストで終わることが求められることになる。

トータル・コストの把握方式に関しても、前節 I-2-(3)で述べた二つの方式のうち、①多元的累積方式よりも、②総括的印象方式にもとづく場合が多いのではなかろうか。②の方が低コストだからである。①多元的累積方式による「コスト認知」のように“綿密な計算”が必要だとその情報処理それ自体に心理的・時間的なコストがかかるが、②総括的印象にもとづく「コスト意識」では簡便に対応することができる。つまり、二つの方式の間には認知負荷の違いがある。たとえヒューリスティクスによるにしても、表1で示した◎付きの「強く関連する」と考えられるコスト要素だけでも、その数は少なくはなく、多元的累積方式にかかる認知負荷は相当大きいものになる。他方、総括的印象方式では、多元的な個別的成本感の査定と積和が意識的には行われないので、認知負荷は格段に小さくなる。

(2) 限定的なパフォーマンス

モノ探しでの最大のパフォーマンス（成果）は「失くしたモノを発見すること」であるが、それを成し遂げられても「元の（失くす前の）状態に戻る」だけである。普通は「失くしたモノ＝発見したモノ」の経済的価値は失くす前とほとんど変わらず、形状の変化もあまり生じないことが多い。つまり、そのモノの探索に大きなコストを投入しても、あまり投入しなくても、そのモノの実体的価値は変わらない。そのモノを探し当てた場合の心理的価値（達成感、安心感などを含む満足感）には投入コストに見合うだけのものがあるかも知れないが、そうした心理的ベネフィットを求めてモノ探しをするわけではない。このようにパフォーマンスが限定されているので、そのモノ探しに投じるコストを増やし

たくないのは自然なことではなかろうか。「手っ取り早く済ませたい」という時間的コスト低減の意向が強くなったり、時には「頑張り甲斐がない」という心理的コスト削減に傾くことがあるのは避けられないだろう。

このように、モノ探し行動そのものの特徴に加えて、そのパフォーマンスの性質も低コスト指向を誘導していると思われる。そして、モノ探し行動の効率、つまりコスト・パフォーマンスは、こうした「低コスト指向」を内包して成り立っていると考えられる。

2. 日常生活行動でのコスト認識

われわれは日常生活で行う無数の行為について、コストをどれほど認識しているだろうか。相当の苦労をしなければならない場合（身体的・心理的コスト）、非常に長時間を要する場合（時間的コスト）、多額の金銭支出を伴う場合（経済的コスト）など、高コストの投入が必要な生活場面は確かに存在する。

たとえば、物品購入の場合に、そのための支出額（経済的コスト）に見合う機能や品質（パフォーマンス）を備えているかどうかを考えることは購買意思決定の中核を占めている。ただ、この場合の多くは“対象物である商品（モノ）”についてであり、そのモノの“買い方（行為）”を問題にしていることは少ないだろう。

筆者は以前に「買探しコスト」という概念を提示して、買探し（売手間比較のショッピング）をするためには、買手は「金銭的支出」のみならず「時間」「労力」「心理的負担」などを費やす必要があると述べて（佐々木, 1969）、「買探しを拡大した結果として予想されるコストの増加分」（限界コスト）よりも「買探しの結果として期待しうる節約額（＝商品単価の低下分×買おうとする数量）」が大きい場合には買探しが行われると説明していた（p.251）。ここでは、「買探しコスト」の多元性に触れていながら、パフォーマンスの内容を「期待しうる節約額」という経済的側面に限定しているが、つづく考察では「消費者の行動は経済的、金銭的な報酬だけを追求するものではなく、心理的、精神的な報酬（優越感、達成感を例示。）をも求めており、今日では、後者の報酬を指向する行動の重要性の増大が問題である」という指摘は行っている（p.252）。また、その後発表したショッピング行動に関する小論（佐々木, 1980）では、経済的・金銭的な報酬を求める「買探し」は合理的購買行動の側面であるとし、その側面をも含んだ「ショッピング行動」にはより広い生活心理的機能があるとして、レジャー的要素が少なくないことをふまえて、その動機は次の5カテゴリーに集約されると述べている：① 買い手としての役割を果たす、② 好奇心

や知的欲求を満たす新情報を求める、③気分転換や楽しさを経験し欲求不満を解消する、④店舗や売場での他者との人間関係から社会的所属感を強め自己確認の機会になる、⑤匿名的な場面で自由に振舞うことで解放感を味わい自己の可能性を試すことができる。こうした社会心理的動機を満たすことが報酬であり、買い手としてのパフォーマンスになる。

日常生活行動の重要領域でコスト・パフォーマンスを考えさせる問題として「買探し、ショッピング」は好例であると言えるが、上記の筆者の分析ではコストについての考察が不足している。その分析を深めるためには、まず、買い手がその行動のコストとパフォーマンスをどのように認識しているかを理解する必要がある。同様の傾向は、日常生活行動のより広い範囲で見られるのではなからうか。たとえば、われわれが日々繰り返している「食事（食行動）」を見ると、それが多段階的で多様な行動から成り立っていることが分かるが（佐々木、1972）、そのトータル・コストとパフォーマンスについての認識も多様性に富んでいることが推測される。筆者は、現在のところ、この問題にアプローチできていないが、消費心理学的課題として興味深く、また重要な内容であるのは確かだと思っている。

おわりに

1. 「コスト・パフォーマンス」の枠組みによる考察の概要

本稿では、モノ探しにおける「効率」を「コスト・パフォーマンス」の観点から考察したが、その概要は次の通りである：

[コスト・パフォーマンスの意味] 『広辞苑（第4版）』にならい「投入される費用や努力に対する成果の割合」と理解し、「効率性が高い」とは「コスト・パフォーマンスが高い」ことを言う。ここで「コスト」は「負担」、「パフォーマンス」は「成果」と訳し、本稿ではこの和洋両語が互換的に用いられる。

[コストの多面性] 「コスト」の内容は多面的で身体的・心理的・時間的・経済的および社会的な諸側面を含み、それらの中には補完的あるいは代替的な関連がある。そのため「効率」を論じる場合には、個別的成本を見るだけでは不十分で「トータル・コスト（全体的負担感）」を問題にする必要がある。

[コストの多段階性] 「コスト」はモノ探し行動の一連の過程の各段階（問題認識、探索意思決定、実行（開始）、実行（探索）、終了）で必要になるが、段階によって関連する個別的成本の程度に違いがある。

[トータル・コスト] 個別のコストの程度はそれぞれ独自の尺度でとらえられるが、それらの独自尺度にもとづくコスト量から直接的に「トータル・コスト」を構成することはできないので、それぞれの個別の負担感を心理的尺度に変換して形成される「全体的負担感」として意味づける。

[トータル・コスト（全体的負担感）の性質と把握] 探し手が負うコストを心理量である「負担感」に変換することは、コストを探し手の“心理的現象”として計量することであり、その全体量である「トータル・コスト」も心理量でとらえることになる。しかし、コストは多面的で多段階的であり、その程度も様々なので、その全体を客観的に把握することは非常に困難である。そのため、探し手は「ヒューリスティクス」と言われる簡便方式による判断を行い、実行可能な形の合理的手段で「トータル・コスト（感）」を把握する。そのヒューリスティクスには、「多元的累積」と「総括的印象」の2方式がある。

[多元的累積方式] コストを構成する多面的で多段階的なコスト要素を積み上げる積算法を採るものであるが、コスト要素が多数になると、さらなる簡便方式として、そのなかで特に強く関連していると思われるいくつかのコスト要素に注目して「トータル・コスト（感）」を成立させる。この方式によるコスト負担感を「コスト認知」と称する。

[総括的印象方式] コスト要素の積み上げを直接的には行わず、それらがまとまった全体印象による総括的なトータル・コスト（感）を形成する場合である。モノ探し行動の過程全体のコスト感をいわば直感的に把握するので、多元的累積方式よりもはるかに少ない認知資源の投入になる。パフォーマンスがモノ探し行動の完了に伴う認知結果として成り立つものであるため、それに見合うレベルの認知的所産になる。この方式によるコスト負担感を「コスト意識」と呼び、上記の「コスト認知」と区別する。

[パフォーマンスの把握] 「パフォーマンス」は、第一義的には「目標を達成したという意識」であるが、付随する「経済的利得感」や「心理的満足感」も含んで成り立ち、モノ探し行動の完了後に顕在化する心理的現象である。心理的満足感は、モノ探し行動過程の途中で生じることがあるが、それが最終的成果（＝失くしたモノを発見すること）に結び付くか否か分からないので“潜在的成果”にとどまる。

[モノ探しの経験的特徴] その特徴には、“小さなモノ探し”が多い、頻繁に行う、日常生活の“すき間”で行われることが多い、“止むを得ず行うこと”で楽しいことではない、できれば他人に知られたくない、状況への依存度が高い、探し方は生活技術として教えられない、などをあげることができる。

[モノ探しにおける低コスト指向] 日常のモノ探しの経験的特徴に加えて、その行動前に比べて対象物の実体的価値がほとんど変わらないことも、モノ探し行動での“低コスト指向”を促す。

2. 結語

生活技術的な観点から言われる「効果的な探し方」（「上手な探し方」や「賢い探し方」という言い方を代表している。）について、「コスト・パフォーマンス」の枠内で検討するとき、「効果的」を成り立たせる「パフォーマンス」と「コスト」について述べ、次いで「探し方」にアプローチすると分かりやすいだろう。そこで「効果的」については：

- a. 「パフォーマンス」は第一義的には「(失ったモノを) 探し出した」という目標達成を意味し、そこで生まれる経済的利得感や心理的満足感などは付帯的成果と見られる。
- b. 「コスト」については、たとえば「時間的コスト」だけに着目して「短時間で探し出すこと」が「効率的」であると見ることが多い。確かに、モノ探しの実践では「時間的コスト」が目立ちやすいが、「経済的コスト」や「心理的コスト」などの増加によって、「時間的コスト」が低減されることもありうるので、トータル・コストを見る必要がある。

他方「探し方」については、一般的には、低コストで目標を達成する具体的な行動技術に関心が寄せられるが、モノ探し行動は「状況依存度が高い」ことを考慮する必要がある。状況に応じた臨機応変的な対応によって問題解決を図ることが多く、標準的な行動技術を示すだけで現場即応的手段とするのは難しい。特定の状況で探し手に求められている探索条件（たとえば「早く見つけ出すこと」「費用をかけずに探し出すこと」など。）を的確に把握して、一連の行為を選択的に構成する“知恵”が重要になる。

参考文献

- 佐々木土師二（1969）流通問題としての消費者行動論. 深見義一・佐藤肇・田島義博編『流通問題入門』有斐閣刊. 235-253.
- 佐々木土師二（1972）行動科学からみたこれからの食生活. 食品工業, 第15巻第15号. 53-58.
- 佐々木土師二（1980）女性のショッピング行動：魅力的なマチづくりのために. 『女性市場（市場研究シリーズNo.1）日本ビジネスレポート. 309-322.
- 佐々木土師二（2018）“モノ探し行動”についての小考：「STピラミッド型モデル」の提案. 関西大学社会学部紀要, 第50巻第1号. 75-88.
- 佐々木土師二（2019a）“小さなモノ探し”の行動論的分析：“モノ探し行動”についての小考(2). 関西大学社会学部紀要, 第50巻第2号. 79-90.

- 佐々木土師二（2019b）モノ探しにおける具体的行為とそのモデル化の試み：“モノ探し行動”についての小考(3). 関西大学社会学部紀要, 第51巻第1号. 31-45.
- 佐々木土師二（2020a）モノ探しにおける呪術的方法：“モノ探し行動”についての小考(4). 関西大学社会学部紀要, 第51巻第2号. 91-108.
- 佐々木土師二（2020b）進行過程としてみる“モノ探し”の諸行為：“モノ探し行動”についての小考(5). 関西大学社会学部紀要, 第52巻第1号. 81-91.
- 佐々木土師二（2021）モノ探し行動の包括的モデルと検討課題：“モノ探し行動”についての小考(6). 関西大学社会学部紀要, 第52巻第2号. 115-132.

（付記）他に『広辞苑（第4版）』（岩波書店刊）を参照しました。

—2021.6.22受稿—